

果樹農家のみなさまへ、時季ごとの耳より情報をお届けします



枯死症対策4：モモ胴枯病の発生を抑える管理技術



- 最終回になりますが、果樹試験場が発表した「モモ枯死症の発生抑制に向けて（第4報）」を紹介します。
- 胴枯病は枯死症の一因となるので、**防態や病徴**を知るとともに適切な**防除対策の実施**が必要です。
- 感染部の樹皮はややくぼみ、表皮下は**褐変**し、**細かい粒（子座）**が現れます（図1）。降雨が続いたり湿度が高まると、子座内の黒い柄子殻の先端から、赤褐色で**糸状の胞子角（胞子の塊）**が放出され、雨水により飛散します。
- 胴枯病菌は樹体の傷口などから侵入するため、侵入門戸となる**剪定切り口や傷口**は早く治し、樹体に傷をつくらないことが重要です。
- 胴枯病の発生初期ならば、**春先～初夏**に病班を丁寧に削り取り、傷口と周辺の健全部に、**トップジンMペースト**を広く十分塗布し、ゆ合を促進することで、**枯死を防ぐ**ことができます（図2）。

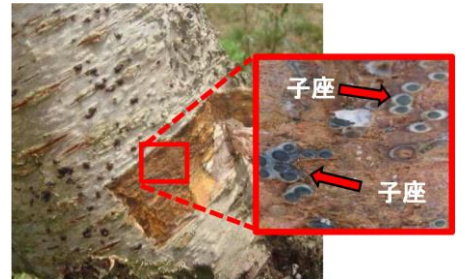


図1 褐変した主幹部と子座



図2 病斑部の削り取りと癒合状況



放射冷却と逆転層



- 地上のあらゆる物が赤外線とともに熱を発生し冷えていく現象を**放射冷却**と言います。
- **曇雨天**では、空に浮かぶ雲が地上を布団の様に包み、熱の発散を防ぎます。
- 反対に、晴れて雲のない天候では、地上の熱は上空に逃げてしまい、空気が攪拌されず**地表面の冷え込み**は厳しくなります。
- 地表面よりも上空の気温が低い**逆転層**が発生します。
- 良く晴れた寒い冬の朝に剪定枝の焼却煙が上昇せずに滞留するのはこのためです。



写真 低地に滞留する剪定枝の焼却煙